



# 町民文芸

## 只見短歌会

六月詠草

大塚栄一

指導

入院の持物幾度も確かめてゐる夜の更けに蛙鳴き立つ

古川 英子

緑なす木々の中なる桐の木の芽吹きは遅し春は盛れど

小倉キミ子

山帽子の花の白きがくすみ初め移ろひゆくか梅雨の深まる

目黒 富子

幼きより睦み遊びし友の計の唐突なれば諾ひ難し

渡部ゆき子

帰り来て故郷に錦を飾りたる友の絵画に魅せられ巡る

五十嵐夏美

桑の実の熟れしを口にしたらるとき放射線量の数値を思ふ

関谷登美子

われ老いて孫がホームに入りしにほっとはすれど頭離れず

馬場 八智

猛暑日のわづかに残る水溜りに二羽の雀は離れず遊ぶ

渡部ヨリ子

ありがとう幸せなりと幾度も言ひるし夫は黄泉へ旅立つ

新国 洋子

( 出 詠 順 )

## 只見俳句会

七月例会

目黒十一

指導

除草剤の撒かれし墓地や夏真昼  
杉菜の根長くて五寸引けば快

恒 夫

晴間はやかたばみの実のはじけ  
ねぶの花さかり過ぎゆく雨の中

洋 子

末広や句匠白寿の宴かな  
車前草やズイコムイコの幼き日

吉 児

喪歸りの冷房効きしコーヒー店  
鳴きたらぬと鳴くひぐらしや雨の中

礼

端居して己の白寿省みる  
小康を保つ一つに冷奴

邦 夫

蝦夷春蟬合唱せわし八十里  
語りつつ行く木道や夏は来ぬ

信

梅雨の闇眼から消え牛の群  
夕立に眼閉じたり少女像

笑 羊

短冊を吊れば風鈴すぐに鳴り  
暑き日は古りし麦藁帽を出し

藤 彦

馬鈴薯の花芽出揃う山の風  
眠りよりゆっくり覚める含差草

リウコ

九十九の爺に孫曾孫御田植  
田草取り人影遠く声遠く

邦 男

洗われし畑の石や梅雨の晴  
南瓜の花土手にぎわしき雨上り

都

炎昼や乾いて崩る砂の山  
置き薬数を数えて汗を拭く

又 壺 歩

三日見ぬトマトの玉や掌に余り  
表替え完了したる夏座敷

一 穂

夏盥鉄人怪獣溺れける  
紫陽花や根方に苗の箱忘れ

一 灯